

## 「違いの先の自分らしさをみつめて」

新島学園中学校2年 岩井 らん

静かな診察室。ピッピッピッという機械音と共にザーザーと雑音の混じる私の心臓の音が響き渡ります。私は、心臓の病気を持って生まれてきました。中隔にある穴が原因で私の心臓は、みんなと違うリズムと音で動き続けています。

小学生の頃、聴診器を使って心臓の音を聞き合う授業がありました。私は自分の番が来るのが怖くて仕方ありませんでした。緊張した私の心臓はドクンドクンという音を奏でてはくれません。ザッザッザッと空気の漏れたにぶい音がスピードを増していくのが分かりました。私の番がきてしまう…。胸に聴診器を当てられたその瞬間「あれっ？らんちゃんの心臓の音、変だよ！みんなと違うよ！」という一番恐れていた言葉が私の胸に突き刺さりました。人と違う事は変な事で、悪い事だと突きつけられた瞬間でした。

その日、家に帰ってからも「みんなと違うよ！変だよ！」という言葉が頭から離れず、私は姉の前で泣き出してしまいました。姉は、何かを探しに部屋を出て行き、戻ってきた姉の手には糸電話がありました。私は保育園の頃、どうしてみんなと心臓の音が違うのかと母に詰め寄った事がありました。その時、母が糸電話を作り、私に私自身の心臓の音を聞かせてくれたのです。母が言いました。「誰にも似てない、あなただけの、心臓の音が大好きだよ。この音が聞こえるだけで家族みんなが幸せなんだよ。」と。姉は糸電話を私に見せる事で、母の言葉を思い出させようとしてくれたのです。姉が言いました。「この世でたった一つのらんの命。その命は誰かと比べることなんて出来ないくらい、尊いものなんだよ。」と。姉の言葉は私の胸に強く突き刺さりました。そして思いました。ぎこちないけど、力強く奏でる私の心臓は、ただそれだけで尊いものなんだ。違いは「自分らしさ」だ。人と比べて心をすり減らすのはもう、やめよう！と。姉の優しさに涙が止まりませんでした。この日から、私は自分の心臓を好きになることが出来ました。姉のおかげで前を向けるようになった反面、私は以前から姉の事が気がかりでした。

姉は、いつも私のそばにいてくれました。私は泣きただけで心臓に負荷がかかってしまうため、赤ちゃんの時から、たくさん抱っこされ、あやしてもらいました。姉も甘えたかったはずなのに、文句ひとつ言わず私に母を譲ってくれました。そんな姉に「私はもう大丈夫だよ」と伝えたい。姉にも自分らしく生きてもらいたい。そう強く思うようになり、私は中学受験をし、姉と違う中学へ進学する決心をしました。姉と離れて知らない世界へ飛びこむことは、不安で怖くて仕方ありませんでしたが、私は挑戦することを辞めませんでした。別々の中学への進学が決まった時、姉は「どこに行っても、らんはずっと私のかわいい妹だから。らんらしく楽しみな」と言ってくれました。

人は、顔も体型も性格も、それぞれみんな違います。そもそも一人一人別の人間なのだから、そこに「自分らしさ」があって当たり前です。生まれたときから「その人らしさ」があって、生きているだけで「自分らしさ」を持っているのです。「自分らしさ」を考える時、足が速い、料理が上手、友達がたくさんいるなど自分の得意なことを自分らしさと表現する事が多いと思います。私の様に、自分の病気を「自分らしさ」と呼ぶ人は少ないのではないのでしょうか。

でも、私はこの心臓を「自分らしさ」だと自信を持って言えます。比較すべき相手は他の誰かではなく、過去の自分だということを知ったからです。心臓のことを他人と比べて、人と違うことに苦しみ悩んでいた過去の自分より、違いを受け入れ、違いこそが個性だと前に向かって進む、今の自分を好きになることが出来ました。それが自信に繋がり、挑戦する勇気や、暖かさ、優しさや幸せを生み、自分らしさを輝かせるのだということを大好きな姉から教えてもらいました。

姉は今年、私の通う学校の高等部に入学しました。ちょっぴり引っ込み思案な姉を今度は私が支えます！！自分らしく、思いっきり学校生活を楽しくでいこうね。昨日よりも成長した、幸せな自分であるために。